

歴史的基體

高坂正顯

「母として男神を産んだ物質は、今や男神の妻となる。バックスはアフロディテの息子にして且つ又彼女の夫であると謂はれる。母と妻と妹とは一つに合する。素材は替る／＼之等の性質を帯びるのである。」Bachofen, Gräbersymbolik der Alten, § das Ei als Symbol. かく語るバックナーフンの言葉は自然と歴史との深き祕儀を證しする。歴史は自然を母とし、自然を基體として生れながら、却つて自然を妻とし、自然に働きかけ、自然を客體とする。自然は歴史の基體にして且つ客體である。かくの如き關係はいかに考へらるべきであらうか。總じて歴史の基體とはいかなる構造を有すべきものであるであらうか。それは歴史の基體であるが故に、あらゆる歴史の母體として、それ自らは歴史の過程の内に入り來らざる筈のものでありながら、しかも歴史の基體であるが故にそれ自らが歴史的世界のものでなければならぬ。かくの如きことは如何にして許され得るであらうか。けだし基體は歴史を生むことによつて逆に自らを生み返すからである。しかしかくの如きことはいかにして可能であらうか。

1 原始自然

歴史的基體と呼ばれるに相應しいところのものは、あらゆる歴史的なるものに先だつものとして、それ自らは歴史的であることは許されないであらう。しかも深く歴史的なるものの誕生の母體として、歴史の根源であらねばならぬであらう。基體と云ふ概念は常にかかる問題を藏する概念である。アリストテレスがウーシアを求めんとする形而上的巡禮の發端に於て、ウーシアをヒポケイメノンとして規定せんとし、しかもかくてはそれは無限定なる質料としてのみ捕へらるべきが故に、遂にト・ティ・エン・エイナイにまで赴かざるを得なかつた所以のものも、ヒポケイメノンの含むかかる問題性の故であつた。しかしそのことはヒポケイメノンが單純に否定され終つたものと解されてはならぬ筈である。“Now the substratum is that of which everything else is predicated, while it is itself not predicated of anything else.” Aristotle, *Metaphysica* 1028^b と云ふ定義はウーシアの重要な一面を指さすが故である。元來ヒポケイメノンとはこの定義の示す如く形式的なる概念である。形而上的範疇である。しかもウーシアとの關聯を本質的に含んでゐる。上に基體と云ふ概念は常にかかると問題を藏すると語つたのもその故である。けだしかなる内容をヒポケイメノンとして考ふべきかは必らずしも一定でないのみか、ヒポケイメノンは常にウーシアとの關聯を含むが故である。基體とは結論を示す概念ではなくして、むしろ課題の潛む個處を示す概念である。それは筈ではなく

して問である。歴史的基體とはいかなる具體的内容に於て考へられなければならないであらうか。又いかにして我々は基體にまで達し得るか。歴史の基體を自然に於て見ようとする我々の豫想は、いかにして維持せられ得るであらうか。ヒポケイメノンと云ふ概念の教へるところに従つて、我々は歴史の底に横はるものを探し求めよう。歴史の底には何が横はるのか。

歴史の底には深き自然が潜むのである。しかしてそのことは、歴史に於て最も歴史的なる層が自然の特性を浮べてゐることによつて氣付かせられるであらう。

歴史は根源的には常に現在の歴史であるといはれる。既にニコラウス・クザヌスもかく語つた。「『今』即ち現在には時間の總括である。過去は現在であつたし、未來は現在となるであらう。それ故に人は時間の内に並列せる現在以外には何もものをも見出さない。過去と未來は現在の展開である……かくて現在はいちゆる時間の總括として一つの現在である。現在は單一そのものである、」*Confessio, De docta ignorantia II, 3. Übersetzung von Schmid, S. 61*と。歴史は永遠の今の展開であり、反復である。歴史の底には永遠の今が潜むのである。しかも永遠の今は深き自然の面影を宿するのである。しかしいかにしてかく語り得るか。けだし永遠の今に於ては自由は限りなき深みに於て否定され、かつ自然の原本的なる形である自己同一、自己反復がそこでは認められるからである。しかしいかにしてであるか。

まことに永遠の現在を客觀的に捕へることは不可能であり、觀想的にそれを外に見出すことも不可能である。その意味に於てそれは外なる自然ではあり得ない。却つて歴史的世界の周邊に散逸せる状態から中心に集結し、實踐的なる自我が行せられる時——あらゆる過去と未來とを現在の一點に賭けて決斷に出づる時——ただその時、永遠の現在も實踐的に行せられるのである。それは世界的那邊にか埋もれてあるものではなく、移り行く現象を貫いて行せられつつ閃くのである。永遠もまた誕生する。實踐的である限り、永遠も亦誕生し甦生し反復される。永遠は永遠なる出來事である。しかしその事はいくつかの異なる永遠が存在すると云ふ意味ではない。無數の永遠は唯一つの永遠であり、同じ一つの永遠である。否、すべての時間がただ一つの現在ですらあつたのである。時間はずべて現在の展開であり、その自己限定であつたのである。かくて永遠の今は一にして多であるであらう。しかしてその事こそ全き連續、自己同一、自己反復ではないであらうか。永遠の今は不變である。歴史の底にはかくの如き意味に於ける自然が潛みはしないであらうか。言はば底なる自然が潛みはしないであらうか。

歴史は永遠の今によつて支へられてゐるといふことは、直ちにそれが底なる自然によつて支へられてゐることを語るであらう。しかもそれを一層確保するところのものは、その時所謂自由は却つてその深みに於て否定されてゐると云ふことである。けだし決斷とは何を意味するか。それは自我

の枠を破ることに外ならないであらう。けだし一つには自我の外に踏み出るが故であり、又一つにはより重大な意味に於て自我の底を破るが故である。まことに決斷とは無内容な決斷であつてはならない。單に主觀的な決斷であつてもならない。自我の奥底に於て世界よりの衝動に促されなければならぬ。自我の底が破れて自我が却つて自我ならぬものから逆に誕生し來ること、それが決斷である。決斷に於ては自我は放棄され、自由は否定される。自由そのものが一つの出來事となる。決斷を通じて永遠が行せられると共に、永遠の底から決斷が誕生する。無限の生命は自我の底が破れることによつてのみ、自我に通ひ來る。自我の底は無底であり、自由の基底に於て自由は否定される。それが永遠の今であるであらう。永遠の今は自由の絶對否定である。

かくて歴史の燃焼するところ、即ち永遠の今に於て、無限の反復と連續が見られ、自由の否定が見られる。それは自然の面影を歴史の最も歴史的なる中心に於て認めることではないであらうか。歴史の底には深き自然がなければならない。そのことを永遠の今が教へてゐるであらう。しかし永遠の今はたしてそのままに歴史のヒポケイメノンであるであらうか。たしかに永遠の今には自然の面影がある。歴史的中心は歴史的基體に連る。永遠の今の根は自然の底に垂れ、深き自然を反映する。しかし永遠の今は直ちに自然そのものではないであらう。永遠の今の底に偲ばれる深き自然とはいかなるものであるであらうか。深き自然は單に永遠の今の内に反映するのみではない。却つ

て永遠の今をして眞に歴史に於ける永遠の今たらしめ、歴史的中心たらしめる。深き自然を歴史的基體と正當に呼び得る所以のものも亦そこにあるのである。しからばいかにしてであるか。

あらゆる歴史的なるものは悉く永遠の今のもとに收められる。過去も現在も未來もすべて永遠の今の限定ならぬはない。永遠の今は歴史的中心である。それに疑はない。しかしその故を以て逆に過去現在未來がそれぞれに永遠の今であると語ることは出来ない。過去現在未來と永遠の今との間には遙なる距離がある。この距離はいづこより醸し出されるのであらうか。それも恐らく永遠の今の自己限定に基くであらう。永遠の今の否定面であるであらう。しかしかく語ることをもつて足れりとはし難い。けだしこの距離の自己否定に於て歴史は始るからである。否定の否定に於て永遠の今は歴史の内に降りたつからである。永遠の今を歴史へと誘ふもの、永遠の今を歴史へと下り來らしむべく歴史の底に潛むもの、即ち歴史的基體は、永遠の今と異りながら、しかも永遠の今の内に存するもの——けだし凡そ歴史的なるものはすべて永遠の今の内にのみあり得るが故に——のみあり得よう。永遠の今は自らの内なる自らならぬものによつてのみ歴史的となるのである。

同じ事態は次の如くにも言ひ表はし得ようか。永遠の今は暗き足場に於て歴史的となるのである、と。それはしかし何を意味するであらうか。

永遠の今が全き瞬間であることを、恐らく人は認めるであらう。且つまたそこに於ては過去現在

未來のすべてが總括されてゐることをも認めるであらう。それは一つの無限なる今である。しかし人は現實の歴史に於て、はたしてかかる一つの無限なる今に出會ふであらうか。もとより人は無限なる今を離れることは出来ない。しかしそれにも關はらず我々が日頃出會ふところのものは、むしろとぎれとぎれの今である。燃焼せる今の奥に却つて間の延びた今を有つ。歴史的名の時は一面に於てあくまでも曆に於て計り得る時でなければならぬ。偉大なる歴史的名の時はそれを切り斷つ處にあるとすら云ふべきであらう。その事は永遠の今が歴史的名となる時には暗き足場を必要とすることを語るものではないであらうか。歴史の底には時の翼の羽搏を遮るものが潛むのである。歴史は常に不完全であると云はれる。歴史は常に實現され終ることはない。永遠に歴史は實現され終る時をもたぬであらう。そこには永遠の今の全き展開を妨げるなにかが存しなければならぬであらう。歴史の時の歩みは遅いとも云はれる。それも亦永遠の今が暗き足場を有つが故ではなからうか。しかも恐らくは又その故に、一つの時代は時の満つるまでは異なる他の時代へと移りゆかないのであらう。いかなる人も一つの時代を思ひのままに推移せしむることは出来ない。時代は自己の約束をもち、場所を有ち、重量を有ち、自己個有の原理を有つ。それは單なる瞬間の集合とは異なる統一を有つ。時代の原理は單に永遠の今より浮び來るのではなくして、暗き足場との關聯を有つ。歴史の底には暗き地盤がある。永遠の今は暗き足場に於てのみ歴史の舞臺に登場するのである。それ

は永遠の今に於てありながら、永遠の今ならぬもの、従つてさきに深き自然と呼べるものの異なる表現と解し得べきであらう。それは歴史を支へつつ、歴史に抗しつつ、しかも歴史の内にある。すべて自然とはかかる性格を有つものではなからうか。永遠の今が暗き足場を踏んで歴史となると云ふことは、深き自然を歴史的基體となすことである。深き自然はあらゆる歴史の基體として原始自然と呼ばれ得るであらう。永遠の今の内にあり、自らの面影をそれに與へ、かくしてそれと一つに合しながら——永遠の今がいかに永遠の自然と親近さを有するかを人は直ちに氣付くであらう、——しかもそれと一つならざりしもの、それが原始自然であつたのである。歴史的なるものはすべて生じ且つ滅すると云はれる。歴史的生死の源泉は原始自然ではなからうか。しかしてすべて歴史に於て認められる自然的なるもの——健康、頹廢、疾患、老衰、慣性、傾向、等々——の根ざす處も亦ここではなからうか。しかしかくの如きことはいかにして可能であらうか。そもそまいかにして原始自然に達し得るのであらうか。

かつてゲーテは原始植物を、また原始動物を直視したと云はれる。まことに彫塑的なる詩人に相應はしく、彼はそれを目のあたり見たであらう。目を閉じて想ひ出せば彼の眼底に浮び來つたと云ふバラの花の様に彼はそれを見たであらう。そしてシルレルの難せしが如くに決して理性の理念としてではなかつたであらう。しかしその場合に於ても、この象徴的なる花は一刻も靜止せず、絶え

ず新なる花瓣を開きつづけた筈である。自然を單なる Produkt としてではなくしに Produktivität として捕へたゲーテには、原始植物も無限なるメタモルフォーゼを通じてのみ眺められ得たのであつたらう。しかしそれにしても、そして産出的想像力の意味に於てさへ、それは眺められ得るであらうか。眺められ得た原始自然はむしろ産出された自然 natura naturata として、産出する自然 natura naturans ではないであらう。してみれば我々はいかにして原始自然に達し得るであらうか。それは單なる理念であつてはならず、又單に直觀され得るものであつてもならない。それは行せらるることによつてのみ成せられるであらう。しからばそれはいかなる意味に於てであるか。

鋭き讀者はここに原始自然と呼ぶものに於て、シェリングの「神の内なる自然」；「Natur in Gott」を想起されたであらう。それは「神自身のうちに於て神自身でないもの」；「was in Gott selbst nicht Er selbst ist」；Schelling, Wesen der menschlichen Freiheit, Werke VII, S. 359 とも定義されてゐる。それは我々の言葉になほせば「永遠の今のうちにありながら、永遠の今と一つならぬもの」にはかならぬではないか。してみれば我々もシェリングに倣つて「實存する限りの存在者」；「das Wesen, sofern es existiert」と「單に實存の根柢である限りの存在者」；「das Wesen, sofern es bloss Grund von Existenz ist」；a. a. O. S. 357 とを區別することによつて、原始自然に達し得べきでもあらうか。光りが闇を根柢として顯はれるやうに、實存する神はただその根柢である限りの自然を通じて

のみ啓示されるのであるであらう。適切にも彼が語るやうに「根柢とは啓示への意志の作用にすぎなかつた」a. a. O. S. 375.

しかしたとへ彼の實存とその根柢との概念が正しく構成されたものであるとしても、そして彼の思想が我々の思索のこれらの點に關するよき導きであるとしても、一つの點に關して我々は彼を補はなければならぬであらう。即ち單なる概念の區分には止らずして、直接に神の内なる自然に到達する操作、言はば形而上的なる行が見出されなければならぬ。しからざればそれは「神自身のうちに於て神自身でないもの」として形式的に規定されるだけであつて、決して「神の内なる自然」として具體化せられることは出来なかつたであらう。ましてそれをプラトンの質料に擬して「波立ち沸きかへる海原」として、或は「根源的なる憧憬」a. a. O. S. 360. として捕へることも出来なかつたであらう。しからば「神の内なる自然」への道は、いかにして單に概念的にはなく、主體的に辿られるであらうか。

しかしその道はシェリングにとつて必らずしも未知ではなかつたであらう。けだし彼は「創造は單なる出來事ではなくして、一つの行である」a. a. O. S. 396 と云ふ。行である限りそれは單なる存在ではなくして「根元的にして根柢的なる意欲」, ein Ur- und Grundwollen “ a. a. O. S. 385 が存せなければならぬ。人間に移して云ふならば「この生に先だつ生」, ein Leben vor diesem Le-

ben " a. a. O. S. 387 が生きられたのでなければならぬ。しかしてそのことを「神の内なる自然」について考ふるならば、内が外であり、外が内であることが生きられたのであると云へよう。「神自身のうち」に於て神自身でないもの」とは、最も一般的な形に於ては「内にして外なるもの」に外ならない。しかも「神自身のうち」に於て神自身でないもの」即ち「内にして外なるもの」とは決して單に事實を示す命題ではなくして、むしろ實踐を命ずる命令であるであらう。Satzではなくして setzen であるであらう。けだし彼自ら語る如くに、それは存在でも認識でもなく、"es ist reales Selbstsetzen" a. a. O. S. 385 であり「根柢の意志」"der Wille des Grundes" a. a. O. S. 375 であるが故である。哲學的認識の發端を事行に求めたフイヒテの試みはこの場合にも妥當する。しかし内が外であり、外が内であることを生きるとはいかなることであるか。かく問ふ人に向つては、私はただ「行せよ」しかして行ずることによつていかに主客の別が乗り越えらるるかを見よ」と答ふるのほかを知らない。眞の實踐に出づるとき自我の底は破れて内は外に通じ、外に見られた世界は却つて自我の底へと沈み入るであらう。そのとき實存するものはその根柢に於て浮び上るのである。シエリングの實存とその根柢の區別はかかる實踐的なる行に於てのみ捕へらるるであらう。それが彼の眞意でなければならぬ。まことに彼は「永遠なる一者が自己自身を産まんとして感ずる憧憬」"es sei die Sehnsucht, die das ewige Eine empfindet, sich selbst zu gebären" a. a. O. S. 359

をそこに認めるが故である。

永遠の今の否定面が原始自然であると云ふことは、逆に原始自然が永遠への憧憬を有し、理念への衝動を有し、混沌は世界への傾向を有することである。ここに混沌よりする世界誕生の發端がある。しかもこの世界の誕生、永遠の創造に於て、同時に人間の自由も創造されたのである。シエリングは云ふ。「人間は、時間の中に産れるのであるが、しかも創造の發端(中心)に創り出されるのである。……人間の生は永遠の行によつて創造の發端にまで達する」*a. a. O. S. 385—386*と。光りの誕生する第一の創造の内に精神の誕生する第二の創造は營まれてゐるのである。否むしろ行に於て原始自然に觸れると云ふ我々の主張に従ふなら、却つて第二の創造に於て第一の創造はなされるのである。歴史の創造に於て自然も創造される。所謂自然とは我々の自由なる行を通じて原始自然の底から登り來るのである。見ゆる自然の底には、我々の自由なる行——精神——も亦そこに根ざす見えざる自然、原始自然が潛むのである。精神即ち内容ある自由とは、原始自然と永遠の今の媒介であり、その結合であるであらう。「人間は根柢より生じたものであり(被造物である)ことによつて、神に對して相對的に獨立なる一つの原理を含んでゐる。しかし正にこの原理が光に變貌されることによつて——であるからと云つて、それが根柢よりすれば暗きものであることに變りはないが——人間のうちには同時により高いものが、即ち精神が昇つてくる。……それで心が二つの原理の

生ける同一であるときに、それは精神である。| a. a. O. S. 255—256. かくシェリングの語る意味もそれであらう。暗黒と光明との生ける同一 *Lebendige Identität* が精神なのである。精神が歴史的世界の結び目である。しかしして精神はまた歴史的世界のうちにあるのである。

しからば精神が實踐に於て自らを産み、かくて歴史的世界が創造されるとき、それに對して所謂自然はいかなる形に於て現はれ、いかなる役を演ずるか。シェリングの第二の創造——歴史の誕生——の内に、いかにして第一の創造——自然の誕生——は含まれるか。かく問ふことによつて、我はシェリングに別離を告ぐべきときとなつた。けだし彼は一應歴史と別個の自然から出發したのに對して、我々は歴史から出發して、その内に自然を見ようとするからである。歴史の外なる自然ではなく、歴史の内なる自然、言はば人間との關聯に於ける自然を考へんとするからである。その相違はしかし恐らくは既に原始自然に對する我々の態度の相違の内に含まれてゐたであらう。シェリングにとつてそれがもし知的直觀の對象であるならば、我々にとつてはむしろ行爲的直觀の對象であつたであらうから。けだし内なるものが外、外なるものが内なることを行爲的直觀と我々は呼び慣はしてゐるからである。しからば行爲的直觀に於て原始自然の底から昇り來る現象する自然は何であらうか。それは單なる自然、即ち人間以前の、たとへばシェリングに於ける如き重力と光としての自然ではなく、人間との關聯に於ける自然、廣義に於ける環境的自然でのみ

あり得よう。しかも環境的自然は、行爲的直觀の内なるものと外なるものとの相即に對應して、内部的環境と内部的環境の二つに分裂するであらう。前者は風土であり、後者は血族である。象徴的に語るならば、一つは土であり、一つは血である。歴史に於ける自然、現象する自然は土と血ではないであらうか。歴史的自然は單なる土ではなく、血として我々の内にも流れてゐるのである。環境は我々の内にもある。その故に歴史的自然は歴史的身體とも呼ばれ得るであらう。歴史的自然は本來運動を含む自然であるのである。形式的なる自然科学的空間及び時間の先に、そこから自然的空間及び時間が抽象されきたるものとして、歴史的なる生の空間と生の時間とが横はるであらう。それが土の廣袤であり、血の脈動ではなからうか。

2 環境的自然

原始自然を歴史の母と呼び得るなら、環境的自然は歴史の妻であり、又妹であるであらう。自由は誕生すると共に、自らの地盤を對境となし、環境となす。原始自然は環境的自然となる。すべての認識、わけても歴史的認識は、自己の Grund を Objekt となすものであることは、既に歴史的認識の章に於て觸れた。スピノーザに於ても認識するとは自らの根柢たる肉體を認識すること——即ち Grund を Objekt とすること——に外ならなかつた。今我々はその實踐的なる基礎づけを期せずしてはたし得た。自由なる實踐に於て、その根柢は對境となる。それは實踐的なる自覺とも考

へ得るであらう。かくて歴史に於ける自由の展開は自然的環境を通じて營まれる。しからばいかにしてであらうか。

歴史とその環境とは互に織りなされるであらう。歴史は自然に於ける歴史であり、自然はまた歴史に於ける自然であるであらう。自由なるもの——それは常に歴史的存在であるであらう——との關聯に於てのみ、それを中心として生ける自然の環境は成立する。自由なき處に生命はなく、自然もない。歴史は自然に働きかけ、しかして或は自然に育まれ、或は自然に損はれる。かくして歴史は展開する。しかしてその場合、環境的自然そのものに於ける二つの面、即ち外的環境と内的環境との調和と不調和とが媒介をなすであらう。風土と血族とは互に互を限定し否定し媒介する。歴史は自己の主題を、その合奏を通じて展開させるのである。私は環境的自然の根本的な性格から出發して、この合奏の跡を尋ねよう。

環境的自然の最も著るしき性格は、それが必ず何等かの地域をなして現はれると云ふことである。そのことは環境と云ふ概念からしてほとんど必然的に歸結するであらう。けだし無限なる環境と云ふことは、圍繞せざる環境であり、環境ならぬ環境であるべきが故に、——けだし無限のかたなる環境は、我々にとつては環境の意義を失ふ、——我々にとつて環境の名に價するものは、有限なる環境であり、纏れる環境であり、閉鎖性を有する環境であらねばならぬであらう。即ちそれは地

域的統一を有する環境であるのである。環境は常に地域的である。しかも注意さるべきことは、かかる地域的統一の閉鎖性は決して嚴密なる閉鎖性ではないことである。丁度地平が相對的である様に、地域も亦相對的なる閉鎖性をもつ。地域は異なる地域に開かれ、何等かの道が地域と地域とを結び、かくて一つの地域は限りなく異なる地域の内に浸滲する。しかも一つの地域は一つの地域として成立する限り、相對的なる封鎖性を失ふことを得ない。そのことは何を語るであらうか。それは地域が無限なる普遍であることも出來ず、又もとより絶對に完結せる個別であることも出來ないことを教へるのである。それはむしろ普遍と個別との間を振動する特殊ではないであらうか。類と個の兩極の間に中間的なる性格を保つ種ではないであらうか。それ故にこそそれ自身が不定なる量であり、相對的であり、言はば常に大にして且つ小であるのではなからうか。地域はかくして種的である。従て環境的自然は常に種的統一をなすであらう。ここに地域的統一と並ぶ環境的自然の第二の性格が見出される。

このことは地域と云ふ概念の本來の場所である風土については、もとより云ふを俟たない。外的環境はたしかにかかる性格を有つのである。しかしこの同じ性格は内的環境たる血族についても成立するであらうか。そのことを種と云ふ概念がしかし保證するのである。けだし地域が本來外的環境に屬するものであるならば、種は——種族と云ふ言葉を想起せよ——正に内的環境に由來するの

である。我々の血は我々にとつて内的なる環境を構成する。種々なる血族を連ねて流れる血は、我々の内なる環境である。我々は環境を自らの内にももつのである。血も亦風土と等しく地域的なる相對的閉鎖性を有つてあらう。人は血のもつ封鎖性に、血族、種族、さては文化的共同體としての民族に於てすら、出會はないであらうか。内的環境も地域的であり、種的であるのである。しかし外的環境と内的環境とは同じ一つの地域であり、同じ一つの種であるであらうか。常に矛盾なき融合を樂しむものであらうか。却つて互に互の統一を破り、かくて歴史的世界の否定契機となるのはなからうか。

南洋の島々を訪れる人は、熱帶的なる樹木と織り合はされて、特定の種族が生育するのを見ると云ふ。人間もまた樹木と等しく土から生れ、土に根ざすのである。「かくて植物地理學者が棕櫚の分布地域を畫くやうに、人文地理學者は黒人の分布地域を畫くのである。同じ棕櫚がニューギニアと南アフリカに見られることは、それが印度洋の周圍を移動したものであること、恐らくは印度のどこか共通の生地から外へ移動し出したものであることを示すであらうが、そのやうにアフリカ黒人或はバブア黒人も同じ事情を示すのである。」Ratzel, Anthropogeographie I. S. 63 かくラツチェルが語るとき、我々は種族も植物も等しく風土の産物であることを思はせられるであらう。まことに「森の住民の全存在に森の自然が織り込まれ、彼等の肉體的存在のうちにさへその痕跡を残してゐる。」

……ブラジルの森のインド人と與アフリカの矮小な狩獵ブッシュ人は、森に屬し、森と共に影を消す。」a. a. O. S. 313—314 に違ない。それにしても血と土とはあくまで離れ難く結びつけられてゐるものであらうか。

精細な調査は、すべての種族が意外に遙かな移動の後に、しかも激しい争鬪や絶滅に瀕する迫害を経て、現在の土地に定着するに到つたことを教へてゐる。すべての民族の傳説は恐らくかかる移動の痕跡を留めてゐるであらう。ある報告者は、ドイツ領ニューギニアの一種族に於て「細長い優美な體格のものとならんで、それと異なる無細工な横幅の廣い體格のものを認め得る。身長は四フィート半から六フィートの間を上下する。同様に皮膚の色も、もとより比較的少數ではあるが明いブルンズの色から、普通の黒褐色に到るまで、種々な差等を示してゐる。之等の土着民は古來の山地の住民と河の谷間に來住し來つた海邊の種族との混合種族と考へ得られよう。」Ratzel, a. a. O. S. 140—141 と述べてゐる。恐らくいかなる民族も種々なる種族の追憶をその骨格のうちに留めてゐるであらうし、又一つの言葉は既に滅びんとする舊き種族の言葉の餘韻を残してゐることは稀ではない。それらはすべて種族が、即ち血がただ一つの土にのみ根ざすのではないことを語るのである。「居住地域は常にただ過渡的な現象である。」Ratzel, a. a. O. S. 159. 「現在の人種の分布は複雑な原因によつて常に流動してゐる一時的な事實である。」Blache, Principes de Géographie Humaine, p. 20.

かく地理學者達が語るるとき、我々はそれを全面的に否定することは出来ないであらう。民族移動は現在に於ても様々な形態に於て、或は大規模に或は小規模に——戦争も民族移動に伴ふ現象ではなからうか——營みつづけられる。種族は土地に對して必らずしも一義的な關係に立つのではないであらう。むしろ血は土に對して動的であり、地域は地域に結ばれ、その閉鎖性は絶對的ではなくして單に相對的であるのであらう。種族に媒介されて地域も亦運動する。風土も主體的となるのである。生の空間としての風土と、生の時間としての種族の根柢には、その具體的根源として生の運動とも云ふべき環境的自然そのものがあつたのである。環境的自然は外的環境と內的環境との矛盾に於て動的である。環境的自然の第三の特性はかくてそれが動的統一をなすことであるであらう。歴史の主題はかかる環境的自然の言はば辯證法的運動を通じて展開されるのである。かつてヘルダーが「歴史とは運動に齎された地理である」と語つたのは、この意味に於て正しいであらう。

環境的自然が動的統一に於てあると云ふことは、それに基く現象として接觸の現象を擧げしめるであらう。いかなる地域もその動的統一の故に、決して完全に孤立してあることなく、必ず他の地域と接觸し、他の地域の内に忍び込み、互に運動し、對立し、衝突し、かくてそこに境界線を劃し來るのである。それは接觸に基く現象であるであらう。それは地域と云ふ言はば一つの生物の、或は伸張し或は收縮する皮膚表面であり、その伸縮の内にその生命の脈動が感ぜられるのである。地

域は境界線を通じて自己の相對的閉鎖性を維持せんとするのである。しかし境界線は決して絶對的であることは出来ない。地域の有する動的性格は境界線をも動的ならしめる。境界線は常に振動し動搖するのである。境界線は不定であり、本來的にはむしろ境界線ではなくして境界地帯であり、境界地域であるであらう。否、境界線は決して限界に止るのではない。否それは屢々乗り越えらるることによつて、より大なる地域への媒介となり、結合點となる。„Erst Schranke, dann Schwelle.“
 Ratzel, a. a. O. S. 185. それは歴史の屢々實證するところではないであらうか。地域と地域は接觸に於て反撥されると共に、又屢々綜合される。地理學の法則は、一つの地域が異なる地域に接觸するところ、例へば山岳地帯が平原に開かれるところ、河川による媒介の可能なところ等に、都會が發達することを教へてゐる。都會に於て地域と地域は接觸し、媒介され、血と血は交り、境界は却つて大なる地域の中心となる。都會に於て小なる地域は破られる。都會はすべて多少とも非郷土的であり、世界的であるのもその故であらう。それも接觸に基く現象ではなからうか。しかして歴史の大なる波動も接觸に於て産出されるのである。「地上には他の民族と接觸せずすまされるやうな民族は一つもない。この關係は民族固有の本性に依存し、民族が世界歴史に足を踏み入れるのも、この關係に於てである。一般史に於てはこの關係が明にされなければならぬ。」*Ranke, Weltgeschichte.*

9. Teil. X. 國家の成立の事情は様々であるであらう。しかし多くの國家は他の民族に對する攻防の

必要の産んだ結果ではなかつたか。ローマに於てまたゲルマンに於て「たみ」とは「もののふ」の義であつた。Thering, *Geist des römischen Rechts*, I. S. 240, Anmerkung, Waitz, *Deutsche Verfassungsgeschichte*, B. I. S. 32. 「國民の集會は戰士の集會であり、」「防禦制度が國家の基本形態を決定する」Thering, a. a. O. S. 248-249. と云はれるのもその故でなければならぬ。それも亦接觸の現象に基くのではなからうか。いはば國家の成立も接觸の現象に基くと云へないであらうか。いかなる國に隣りするかと云ふことが、その國の運命の多くを決定するであらう。「一國の歴史は常に同時に彼の政治的隣邦の歴史の一部である。歐洲に於ける大ブリッテンの古き歴史は主としてイギリス的・フランス的であり、デンマークのそれは、デンマーク的・ドイツ的である。」Ratzel, *Politische Geographie*, S. 223. 接觸の現象に於て隣り合ふ關係も基礎づけられてゐるのである。戦争と平和、正しき方向へ或は悪しき方向への世界歴史の運行もそれに基く。一國の興亡もまたしばしばそれに基くのである。ギリシヤの隆盛は、東洋と西洋の接觸地點に位置してゐたことに基きはしなかつたか。そしてイタリヤは地中海地域のあらゆる接觸の中心に位置することを、その半島的な地形が物語つてはゐないか。まことに位置は土地の廣袤にもまして重大である。新大陸の發見と共に、文化の中心は地中海沿岸を去つて、大西洋沿岸に移動する。「支配的なる權力と教養の中心が、西方の國々と大西洋の沿岸に移植されたと云ふことは、」——ランケによれば、——「凡そ確證し得る歴史に於て

現はれた、あらゆる出来事の内、最大の出来事であつたのである。」Ranko, Englische Geschichte, S. W. 14. S. 3. テームスの位置はティベールの位置にまさつたのである。ラッテヘルは云ふ。「かくて位置は最も内容豊かなる地理學的概念である。……ギリシャの自然の事情について語られるあらゆる特殊な事柄は、東洋への門口に立つギリシャの位置の背後に姿を消してしまふではないか！……小民族が歴史的に重要性を有し、大民族が歴史的に重要性を有さず、無價値に等しいことは、常に位置が空間よりも優越せることの表現である。」Ratzel, a. a. O. S. 137. ラッテヘルにとつても重大と考へられた「位置」の概念も、地域の動性、及びそれに基く接觸の一現象ではなからうか。境界、限界が運動の表現である様に、——運動するもののみが限界をもつ——位置も亦運動の表現である。それは運動の集積であり、運動の發端であり、運動の方向を示す。生ける位置としてそれは方向をもち、傾斜をもつ。環境的自然は位置づけられた自然である。

私はいくつかの地理學的基础概念を提出した。しかしそれは言はば地理學的範疇表を掲げんが爲ではなかつた。ただ之等の基礎概念がそれぞれに矛盾的であり、その矛盾を通じて歴史的世界の運動が營まれ行くのを指摘せんが爲であつたのである。しかしその爲には更に尙ほ、歴史的世界の運動にとつては特に重要な二つの特性が、環境的自然の内容的なる規定として擧げられなくてはならない。環境的自然の地域的統一、種的統一、動的統一及びそれに由來する諸規定に於て、主として

環境的自然の形式的なる規定を示した私は、今やその内容的なる規定に移らねばならない。しかしそれは一つには外的環境と内的環境の依存的統一、——之が環境的自然の第四の特性をなす、——であり、また一つは外的環境と内的環境の歸屬的統一、——之が環境的自然の第五の特性をなす、——である。しかしここに到つて環境的自然はもはや既に單に自然的であり、環境的であるにはつきずして、更に歴史的であり、主體的であり、環境的自然それ自身が己れ自身に對して獨立し、距離を有し、自然自身に對して抽象の作用を營み、かくて歴史的世界を準備することが明になるであらう。種的なるものそれ自身に於ける分裂、かくてその主・客體化が自らを歴史的世界へと否定的に高めるのである。しからばまづ外的環境と内的環境の依存的統一とはいかなることであらうか。それは内的環境が外的環境に依存し、血は土より誕生すると共に、逆に外的環境のもつ生命は、ただ内的環境によつてのみ可能となることを意味するのである。しからばいかにしてであるか。

すべての生命が大地に根ざすこと、即ち血は土に、内的環境は外的環境に依屬することは、「母なる大地」の信仰として、多くの民族に行き汎つてゐることであらう。耕作の神は結婚の神であつた。デメーテルは大地の豊穰と婚姻の神であつたのである。人間の生誕も自然の實のりも、同じ神の支配の下にあつた。ただもとよりデメーテルに關しては、それが一般に自然の豊穰さよりは、秩序正しき耕地の豊穰さを司つた點に於て、それが持續的なる秩序 *eine dauernde Ordnung*, Hirzel, The-

mis, Dike und Verwandtes, S. 326-329 の神であつたことが察せられる。それは定住的なる農業が、始めて秩序正しき結婚を可能にしたであらうことを思はせ、また都市と國家の建立がデメーテルに感謝された所以の一部を了解せしめる。それは總じて秩序の神であつたからである。しかしそれにも關はらず「人は既にデメーテルの名に於て第二の『母なる大地』を再認せんことを欲した、」*Rollé, Psyche. S. I. 212* ことも疑へない。それはあくまでも地の女神であり、その故に豊穰と結婚の神でもあつたのであらう。同じ事情を示すものとして次の引用が許されたい。「しばしば祈禱に先だつて、穀物の種が祖父の髑髏の上に置かれた。若い妻は呪文を唱へた後で、口唇で髑髏から穀物の種を受けて、食べなければならぬ。するとこの結婚から生れた子供は祖父の再生なのである。こうして種を呑み込むことには、非常に重大な意義がある。何故かと云へば、ここに畑の耕作と社會生活との間に、根の末梢にまで及ぶ深い結合の存することが認められるからである。結合するものは土地である。大なる原始土地である。生命の最後の遺骸はそこに消え、又そこから生存の最初の萌芽は現はれる。この大地、そこからすべては生じ、そしてそこにすべては消えてゆくのだ。この一つの大地、そこに於て發生と消滅とは一つの作用に融合する。」*Frobenius, Paideuma. S. 117*. デメーテルの神話がさうであつた様に、このアフリカ未開人の風習も、すべては大地から生ずること、社會の制度すら土地より生れるにはあらざるやを思はしめる。血はすべて土に依存するのである。

しかもそれは神話的世界、未開社會に於てのみ妥當することではない。文化と歴史のすべてはそれに依存する。卓越せる文化の發生には高度の人口の密度が必要である。しかしてそのためには豊富なる自然の物資が前提される。かくて古代史の舞臺は河と海に沿ふて展開された。そして現代に於ていかに自然の産物が、文化の形態と國家の運動を規定してゐるかについては、貿易の表を見るだけで足りるであらう。人は世界に於ける麥、米、綿、羊毛、鹽、砂糖、石炭、鐵等々の動きを見るがよい。

しかし人は單に自然から誕生して、自然の産物を採取するのみではない。人は耕作し培養する。血が土に依存するのみではない。土の生産力が却つて血に依存するのである。例へば栽培植物の分布地圖を畫くならば、人はそれによつていかほど自然の姿が變化せしめられてゐるであらうかを察し得るであらう。肥料による生産力の反復的なる持續、草原と森林の開墾地への轉化もそれを教へるであらう。土の生命力がそこに繁殖する生物の内のみ認められ、砂漠は生物を住まはしめざる故に死せる土であるならば、我々の出會ふ多くの土地は、その生産力を人間の媒介に負ふとも云へよう。人間は自らの生命のために、自然の生命力を助長する。人間は單に自然から生れるだけではない。人間は更に自然の生命力を支配し、その方向を規定する。人間は人間化された自然界をつくるのである。人間に媒介された生命を産むのである。そこに生産が營まれ、やがて歴史と文化が展

開するであらう。文化とは Kultur と云ふ言葉の示す如く、人間を産む土の生命力が逆に人間によつて培養され、助長されるところから生ずるのである。しかしてここに到つて血と土の距離、相互の獨立と依存とは蔽はれ難く現はれる。環境的自然は自ら自らを對立的に分裂させるのである。自らを産出せる自然の生産力を自ら逆に産出せんとすることによつて、血は自らの根據を自らの内に有たんとし、かくて血の土よりの獨立性は明になる。我々はここに單なる自然ではなくして、むしろ生命の立場を有するとも云へよう。生命とは自然的基體がそのままに主體性を現はし來る處に見られるのである。

しかし農業は尙ほ依然として自然に依存するであらう。春に播種し、秋に收穫すること、曆の重要さ、冬季の休業は、それが風土に依存する季節的勞働なることを教へてゐる。人間の自然からの獨立は、冬季も尙ほ手工業を營むこと、かくて商業への農業からの遊離に於てより明に認められるであらう。けだし商業の著るしい性格は、それが異なる地域と地域を媒介することにあり、そこに人間の土地からの獨立性が成就するが故である。まことに「交通は常に地上の空間の克服であり、かくて交通の發達は空間との鬭争である」Ratzel, Politische Geographie, S. 321 であらう。しかし交通はなほ空間の形式的なる克服にすぎない。血の土からの内容的なる獨立は、土に於ける最も非生命的なるもの、即ち礦物が血によつて逆に生命を與へられるところに成立するのである。もはや植

物でも動物でもなく鑛物が、即ちそれ自身としては生命なきものが、人間によつて始めて獨立的な活動を營むに到つて、血は土から獨立するのである。けだし人間の生命が自ら、自然の外に第二の自然を造り得るに到つて、自然からの人間の獨立は疑ひ得ざるものとなるからである。それを人間の道具、器具、機械が教へるであらう。道具による加工、器具による受用、機械による生産の區別には今は立ち入らない。しかし畢竟するに道具的なるものとは、非生命的なるものの、肉體化、生命化であり、しかしてそれを通じて非生命的生命が、第二の自然として、單なる血の有し得ざる別箇の生命を帯びて産出されるのである。しかして現代とは正に鑛物的文明による植物的文明及び動物の文明の屈服と、その故にまた逆に動植物的文明のそれに對する反抗を含む時代とも考へられ得まいか。人間は非生命的なるものに生命を與へたことによつて、自らの深き生命を感じたと共に、又自らの生命の脅迫を感じるのである。しかしそれは人間の避け難き運命であらう。人間は自然から獨立せんがためには、自然の内に自然を克服すべき手段を見出さねばならない。空虚なる自由は自然に對して何事をもなし得ない。自然を支配する手段は自然の内に見出されなければならぬ。しかし自然を支配する手段が自然の内にもあることは、絶えず人間は自然を克服すると共に、自然を克服する手段によつて逆に克服されることを意味するであらう。人間はあくまでも自然に對して相互依存的である。しかしてそこに人間歴史の諸階段が相互依存の過程を通じて成立する

のである。歴史に於て經濟的基礎の極めて重大な所以はここにある。しかし土と血の關係は相互依存にはつきないであらう。單に經濟的關係のほかには法的關係が認められる事を要求する。それは土と血の間なる歸屬的統一の現象に基くのである。そこに於ては環境的自然の主體性は更に明になるであらう。しかれば環境的自然の第五の特性たる歸屬的統一とはいかなるものであるであらうか。

もとより人間の土地に對する關係は一義的ではない。一方 *loi de Participation* によつて土地と結合され、睡眠に際しても頭は一定の方向を嚴守し、環生の地を去ることは殆んど死を意味する土人があると共に、*Levy-Bruhl, La Mentalité primitive. Chapitre VII* また他方「印度人の傳承に於ては人口が増すとその民族は移動し始めることは殆んど自明のことと思はれた」*Ratzel, a. a. O. S. 79*と記される民族もある。即ち人間の土地に對する關係は二義的である。一方水平的な關係をもつと共に、他方垂直的な關係をもつのである。人間は移住と定着の間を動搖するとも云へよう。コールが語つた如く「人間は絶えず彼の境遇と位置を變化し改良せんと努むるところの、社交的にして且つ不安定な存在 *ein geselliges und unruhiges Wesen* である」*Kohl, Verkehr und Ansiedlung der Menschen. Ratzel, Anthropologische Geographie. I. S. 74*。そのことは牧草を追ふた昔から、植民地を争ふ近代國家に到るまで、それがいかなる動機——清き泉、豊なる草原、防禦と攻撃、さては市場の獲得——に基くにもせよ、變りはない。まことに「運動するもの、彼の土地に對する全關

係が地理學の對象である。」、Die ganze Beziehung des Beweglichen zu seinem Boden ist Gegenstand der Geographie. Ratzel, a. a. O. S. 76. かつてカントは人間の非社交的社交性 ungesellige Geselligkeit について語つた。その如く我々も血の土に對する非定着的、定着性について語り得るであらう。さきに内的環境と外的環境の動的統一について語つたのもその故である。しかし單なる動的統一は不確定、不完全なる統一に止り、未だ矛盾的なる統一と呼ぶことを得ないであらう。互に主體的、獨立的なるものの動的統一が始めて矛盾的統一であるのである。内的環境と外的環境が、單なる自然の環境ではなく、既に主體的なる意味を具したとき、始めてそこに矛盾的統一が認められ得る。歴史的運動を支へるところのものは、單なる動的統一ではなくして、かかる矛盾的統一ではなからうか。歴史の底に潛むものは、單なる自然ではなくして主體的なる自然であり、否定を含む自然でなければならぬ。それは物質ではなくして生命であり、更に精神との關聯に立つであらう。ただそれはあくまでも精神化され終つたものではなく、精神との關聯を破棄し得る可能を藏せねばならぬ。原始自然への復歸を含まねばならぬ。かかる主體的否定的自然が、歴史的世界、わけてもその經濟的政治的基底を構成するのではなからうか。しかし歸屬の現象がその最も根本的なる現象をなすのではなからうか。

けれど人間は歸屬の現象に於て、自己が自然に屬するのではなく、自然、わけても土地が自己に

屬することを自覺するからである。自己の主體性を自覺するからである。人間の主體性は空虚なる自立性ではない。それは土地の使用、更には支配、所有を媒介してのみ成立するのである。既に人間の生活は孤獨ではない。人間は社交的動物である。しかも土地を離れた人間の生活はあり得ない。同一の土地の共同的使用に於てのみ人間は生活し得る。人間は共棲するのである。従て一人の人の一定の土地に對する關係は、彼の屬する集團との關係によつて制約され、一つの集團の彼の土地に對する關係は、他の集團に對するその集團の關係を背景とする。人間の土地に對する關係は、かくて直接的ではなくして、人間の人間に對する關係によつて間接的に、従つて否定的に媒介されてゐると云ふべきであらう。かかる否定的媒介的なる契機が土地の支配權、所有權の基礎をなすのではないからうか。もししかりとすれば、人間の土地に對する主體性は法的なる制限に於て自覺されると云ふべきであらう。しかしてそのことは逆に土地も法的なる存在として、その限り人間に對して束縛的であり、主體的であるとすら云へよう。かくて土地に對する人間の關係の諸形態は、種々なる時代及び社會の構造を反映し、且つその基礎をなすのである。

もとよりかく語るることによつて私は土地所有の原始形態について何事かを立言せんとするのではない。それは私の意圖の外にあり、又能力の外にある。直ちに原始的なる土地總有制を信ずること、少くともそれを特殊なる歴史的事實以上の普遍的法則として、あらゆる土地への必然的妥當を

主張することは躁急であらう。ロシアに於て發見されたと信せられたその痕跡なるものも、意外に新しき起原を有し、或は十六世紀以降のこととされ、或はトルコの支配の下に成立したと云はれる。von Below, Probleme der Wirtschaftsgeschichte, S. 7 ff. だが私は人間の主體性は、土地の何等かの支配或は所有を前提し、しかしてそれは法的に媒介せられてゐることを主張せんとするのみである。従つて又土地の私有が或は掠奪に基くか。——ローマに於ては「財産の象徴は槍であつた。」Thering, Geist des römischen Rechts I. S. 113 と云ふ。土地も不動のものではなくして掠奪し得るものであつた。權力は力にほかならなかつたのである。——或はアテネに於ての如くに自己の屬する共同體よりの是認に基くか、かくてアテネに於ては外國人の土地所有は禁せられたと云ふ。Vindogradoff, Historical Jurisprudence, II. p. 201. 或は血と關聯するタブー的なる要素に由來するか。それを決定せんとするものでもない。「シュルツは語る。『恐らく死者が最初の異議なき純人格的なる土地所有者であると云ふ提言を敢てなし得るであらう、』と。人が恐れて避け、その植物や動物を損することなき墓地は、まことにそこに葬られた死者の最も確實なる所有である。マオリ人達は死骸の運搬された道路や入江をさへも避けるのである。我々は彼等については死者の葬られてゐる場所に對して、その縁者が權利を有すること……をも知つてゐる。しかるに逆に幾多の民族に於ては何人も自分の生れた土地に對しては權利を有つのである。ただマオリ人達は、それはその土地が新

に誕生したものの最初の血を飲んだためだと云ふことに基けるのである。そしてオーストラリア人達に於ては、受胎の行はれた場所に對する要求すらも現はれるのである。」Katzel, Politische Geographie, S. 36-37. 土地私有權の發端がかかるタブー的なる要素に根ざすにしても、尙ほ法的なる背景が想定されよう。しかしてそれと共に土地も不可侵的なる意義を帯びるのである。土地が人間に屬することによつて、逆に人間が土地に歸屬するのである。このことを土地と共に賣買された農奴が語らないか。轉住權を拒否された封建治下の農民が語らないか。土地所有の制限を五百ユーゲラに定めたと云ふ *Lex Licinia* の昔から——尤も當時一般の土地所有は七ユーゲラであり、更に古くは二ユーゲラであつたと云ふ *Ihering, Geist des römischen Rechts II. 1. S. 242 Anmerkung*——グラカス父子の改革に到るまで土地問題はローマ史の輕視し得ざる一面を形成するのである。しかして封建制度の本質が土地と關聯することについては斷るを要しないであらう。經濟と法律、社會と國家、總じて歴史的世界の實在的側面が土地と關聯することは、ほぼ是認されてよいであらう。しかして土地が基礎的なる意味を歴史的世界に對して有するのは、單に物理的自然としてではなくして、既に歸屬の現象に於てでなければならぬ。この重要にして且つ興味深き問題に對しては、更に立入る力を私は有さない。ただ將來の研究を自らに期するのみである。テンニエスは云ふ。「かくて土地に對する——殆んど専ら私的にして個人的なる——所有權の形成は、ただ徐々にしかも多

くの反對を越えて遂行された歴史的なる過程であつて、部分的には尙ほ進行してゐる。その過程はその完成を、土と金の區別の止揚の内に見出す。その際、金は單なる交換手段と見ても、資本と見られてもよい。] Tonnies, Geist der Neuzeit. S. 55. 資本制度の特色も、そこに於ける土地の意義の變遷の内に反映するであらう。歴史的世界の動力としての環境的自然は、特にその歸屬の現象に於て認められるとする私の豫想は、少くとも輪廓的には承認され得るのではなからうか。

基體は主體に連ると始めに語つた言葉を、今ここに想起しよう。歴史の基體も歴史の主體に關聯するのである。環境的自然は深く國家及び文化に連るのである。ただそれが如何なる階段を経過してであるかは今は觸れない。かかる階段なるものが、實は却つてしばしば廣義に於ける國家及び文化の内にそれと共に生ずることを注意するに止めよう。しかしいづれにせよ、環境的自然はこの方向に於てそれ自らが主體的な意味を有つのである。かくてのみそれは歴史的世界の動力となる。そのことを今歸屬の現象が教へたであらう。しかしその際、國家及び文化に對して自然の有する意味はそれぞれに異なる。けだし國家に於ては、外的環境と内的環境は單なる動的統一を脱して、一應の完結性を有つに反し、文化は更にその完結性を破るが故である。そこに歴史的世界の力學が認められるであらう。歴史的世界はかかる國家と文化との矛盾を通じて運動するのである。もとよりそれ

は別個の研究を必要とする複雑なる問題であらう。ここにはただその地域的な廣袤に對する關係を顧慮することを以て満足しなければならぬ。

國家にとつて土地は本質的である。國家は廓大された家族であると云ふ神話的な言説がいかに屢々なされても、土地なき家族、否、民族——たとへばユダヤ民族を思へ——さへ可能であるに關はず、土地なき國家は不可能であるが故に、しかも特定の土地との結合なき國家は不可能なるが故に、この比論は直ちには成立しない。國家以外の集團に於ては可能である土地よりしての人間の遊離は國家に於ては許されない。多少の例外はその否定とはならない。「アラリックに率ゐられて移動しつゝある西ゴート人や、海上へ避難せるアテナイ人を、人は尙ほ依然として國家と呼び得るであらう。しかしそれは未完の状態であり、過渡的の狀況である。」Treitschke, Politik I. S. 202. しかるに之に反して「土地を失ふと共に民族は後退する。」Ratzel, Anthropologische Geographie I. S. 24. 否それのみか「大國も土地の支持を失ふと共に滅亡する。その國の威力は、大部分土地の廣さに存してゐるのである。」Ratzel, a. a. O. S. 159. かくて國家の二つの要素として領土と人民を數へることとはアリストテレス以來むしろ普通であらう。「國家はあらゆる人間的なるものと等しく、自然の基礎の上に息うてゐる。國家にとつて本質的な二つの要素は外的自然に屬してゐる。即ちその領土と民族……である。」Jellinek, Allgemeine Staatslehre. S. 75. かくイェリネクも語るのである。

まことに「いかなる國家も人間の一片にして、且つ土地の一片である。」Ratzel, Politische Geographie. S. 2. 國家にとつては領土は決して單にその財産と云ふ如きものではない。土地はむしろ國家の人格の一部を構成する。「それ故……領土の毀損は、國家それ自身の毀損であつて、決して國家のなんらかの所有物の毀損ではない。人格に對する犯罪であつて、財産に對する犯罪ではないのである。」Kjellén, Staat als Lebensform. S. 55. してみれば國家は人間と土地の一應の完結的統一に於て存在し、その成立は兩者の矛盾の超克によつてのみ可能であるであらう。國家の興亡はかかる矛盾の統一の運動に於て認められる。國家の基礎には主體的なる自然が包含されてゐるのである。イェリネツクの云ふ如く、土地も人民も共に、客體的にして且つ主體的である。Jellinek, a. a. O. S. 394. 國家は土と血の統一として最も自然に近接する歴史の基礎的部分である。國家は言はば歴史的なる自然物であり、歴史的生物である。そのことを國家の有する權力が物語らないであらうか。權力なく權威なき國家は國家ではない。權力とは主體化された自然に外ならぬであらう。それは高次の、即ち法的に媒介された衝動的自然である。それは國家の肉體であるであらう。國家の發動する力の根源は主體的自然である。普通に國家の三要素として土地、人民、權力が數へられる Jellinek, a. a. O. S. 394. のもその故であらう。國家とは法的否定を媒介とせる自然である。そこに單なる民族ではなく、ランケが「神の思想」„Gedanken Gottes“ Ranké, S. W. 49/50, S. 329 と

呼ぶ如き意味に於ける國家が可能となる所以もある。單なる民族は歴史の主體とはなり得ない。世界歴史の主體としてランケの考へんとする諸國家は、かかる否定を含む自然をその地盤とするであらう。それは法を無視し得ず、正義を無視し得ざる國家でなければならぬ。文化的國家でなければならぬ。けだし法と言ひ、正義と云ひ、既に文化的なる意味をもつからである。しかしてそこに歴史的世界に於て國家が一つの矛盾——しかもそれを通じて歴史的世界の運動が營まれる一つの矛盾——に面しつつあることが察知されよう。けだし國家に對して文化は、それが文化的であればあるだけ、その境界を超越することを、その特性とするからである。そのことを既に土地に對する文化の關係が教へてゐないであらうか。

まことに國家は一定の土地及び民族との緊密なる結合を脱し得ないに關はらず、文化は特定の土地及び民族にのみ拘縛せられざる自由を有つ。文化は世界性を有し、普遍性を有するのである。そのことを特に國家の範圍を越えての文化の傳播が立證するであらう。ギリシヤ文化は單にギリシヤの國家の内にも局限されはしなかつた。文化の名に價するほどの文化は、國家よりも廣き範圍を要求する。國家ではなくしてむしろ世界を要求する。それが文化の意志でもあらう。國家の如き權力と拘束力とを有せざるにも關はらず、文化は國家よりも廣き範圍に汎つて、自由なる臣下を獲得する。「文化の發展は狭き地域に於て準備され、そこより發して大なる力に到達する。しかし文化的發

展は政治的發展の如くに、永く狭き境界内に拘束せられることを得ないであらう。……文化は久しく狭き地域と唯一の民族の内に局限せられることを得ない。文化は傳播する、それが文化の本質に存する……。」[Ratzel, Anthropologische Geographie. I. S. 156. もとよりいかなる國家もただ一つ孤立して存することなく、常に他の諸國家と特定の「國家系」Staatensystem を構成するであらう。その點特殊なる局部的文化の上に大なる「文化圏」Kulturbkreis が成立するに類似する。しかしその場合に於ても、エドワート・マイエルが斷ることく「國家系」と「文化圏」とは必らずしも一致しない。Ed. Meyer, Geschichte des Altertums I. 1. (Elemente der Anthropologie) S. 199. 文化史は遽かに政治史とは合致しない。若きトライチケが「鋭く區別さるべき」ものとして「文化の問題と權力の問題」Treitschke, Die Gesellschaftswissenschaft. § 4. を峻別せよと云ふ所以である。否、そののみか、文化は國家よりもより大なる範圍を單に空間的に占むるのみではなく、更に時間的にも占むるのである。そのことは、政治的上層が破壊された後、尙ほ經濟的文化的發展は持續すると云ふことによつて、歴史的に實證されるであらう。ゲルマンの侵入はローマ帝政の破壊を招きはしたものの、直ちにローマ文化の否定を意味しはしななかつた。最も著るしき影響を民族移動から受けたはずのオーストリア・ハンガリーに關して、コンスタンチン大帝からカール大帝に到るまで、文化の持續、否、特殊の發展すら認められることを、リーゲルはローマ後期の工藝美術に關して指摘したのであ

20. Riegl, Die Spätromische Kunstindustrie nach den Funden in Österreich-Ungarn. S. 7-9. 「たゞへ多くのものは破壊され掠奪されたにもせよ、古き居住地は久しく放棄されることなく、都會は直ちに復興され、蒙れる損傷も少くとも一部は修復された。そのことを我々は見たのである。古き文化發展の數多くの個處、否我々は安んじて言ひ得るであらう、最も重要な個處に於て、ゲルマン人とローマ人との争闘の時代を越えて、文化發展の持續が認められるのである。」とドブシュも云ふ。しかしして更に語る。「經濟の發展、否全文化の發展が政治的發展と異なる道に於て營まれることはしかし稀ではない。わけても政治的發展の支持者は常に同時に文化的發展の指導者であるのではななく、却つて實に屢々、政治的には下層の部分が、文化に富み且つ與へる部分であつたのである。」 Dopsch, Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung. I. S. 192-194. かかる事情も國家を越えての文化の世界性に基くのでなければならぬ。

我々はかくて一方閉鎖的なる國家と、他方開放的なる文化とを見出した。もとより文化なき國家はやがて法も正義もなき國家として自らを否定し、——「理念は國家の實體である。國家はそれに基いて意志の連續性及び運命を得る。」Jaspers, Philosophie. II. S. 380. かくヤスベルスが語る如く國家の連續性は理念に基く、——又他方、國家的權力の背景なき文化は、やがて地盤なき徒だ花として萎むではあらうけれど、即ち互に互を豫想し且つ含み合ふであらうけれど、その故にこそ互に矛盾

盾し、その矛盾に於て却つて歴史的世界を運動せしむるであらう。そのことは國家に對する經濟及び社會の意味を考ふる時、一層明になるであらう。はたして經濟も文化の一面であるか否か。即ち文化史のほかに經濟史を考ふべきか、——恐らくかかる經濟史は經濟的基礎なき文化史が空虚であるが如く空虚であり、眞の文化史はむしろ經濟史をも含むものでなければならぬ、——或はしからざるか。更に「文化の外的全體形式 äusserliche Gesamtform は、しかるに國家及び宗教に對して、廣義に於ける社會である」Buechardt, Weltgeschichtliche Betrachtungen. S. 57 とブルクハルトの語ることくに文化と社會の關係を考へるべきか。或は又人間の共同生活の意志を國家とし、生命を社會とし「人間の共同生活の内容は國家と社會、社會と國家の絶えざる闘争でなければならぬ」Lorenz von Stein, Die Geschichte der sozialen Bewegung in Frankreich. Einleitung. S. 38 と語るロレンツ・フォン・シュタインに組すべきか。更にシュライエルマツヘルと共に「國家の生命は社會との相互作用にある……或は法律と營業との媒介にある」, die Vermittlung zwischen Gesetz und Geschäft“ (Treitschke, Die Gesellschaftswissenschaft. § 13. による) と語るべきか。いづれにもせよ國家に對して社會、經濟、文化が特有の關聯に立ち、國家に對して矛盾的存在することは承認せられ得るであらう。しかししてそれは畢竟、廣義に於ける文化が、國家の制限を越ゆるところに成立するのではなからうか。——トライチケは云ふ。「國家形態は社會と決して完全に一致するものではない、

もし一致すればあらゆる歴史的運動は停止するであらう。」a. a. O. S. 13. まことに歴史的世界の運動は國家と社會及び文化の矛盾によつて營まれるのである。しからば國家と社會及び文化を媒介するものは何であらうか。

ブルクハルトは歴史を動かす三つの動力として國家と宗教と文化の三つを數へた。Burchardt, Weltgeschichtliche Betrachtungen. S. 20. それは例へばレンニエスの經濟力、政治力、精神道德力の三つの階層的なる歴史の原理に比して、Tönnies, Geist der Neuzeit. S. 166. 言はんやリツケルトの形式的なる文化價値の體系に比して、Rickett, System der Philosophie. S. 319 ff. 歴史に於ける集團性、主體性を捕へてゐる點に於て遙かに具體的であると云ひ得よう。しかし彼はそれ等三者の相互作用を説くのみであつて、その内面的なる統一について語ることを避けるのである。それは一つには、彼の暗き世界觀——例へばしばしば批難せられる彼の言葉「されば權力は何人がそれを行使するにもせよ、それ自體に於て惡である」Burchardt, a. a. O. S. 36. 97. を思へ——のなす業でもあらう。或はまた一つには史家としての彼の慎重さのしからしむるところでもあらう。けだし客觀的に歴史的過程を通じて、かかる内的統一を求めることは、歴史の本性がこばむが故である。かくて彼は文化と國家の統一の把握を斷念し、しかして云ふ。權力を欲するものと文化を欲するもの、——彼等は恐らくは共に第三の尙ほ未知なるものの盲目の道具である。」a. a. O. S. 98. と。しかし

對象的、觀想的に兩者の統一を捕へ得ないと云ふことは、その内的統一が存せざることの證ではなくして、ただそれが主體的實踐的のみ捕へらるべきことの意味でなければならぬ。宗教すら、あくまでも客觀化せられるならば、制度としては國家の内に吸收され、その内容は文化の一部に墮するであらう。宗教を生ずものは主體的なる實踐であり、當然道德的なる意味を有するのである。しかしてかかる道德宗教こそ、その主體的實踐に於て、國家と文化を内的統一に齎すものではないであらうか。國家と文化とはブルクハルトの云ふ如く第三の未知なるものの盲目の道具ではなくして、深く實踐的主體的なるものの倫理的なる道具でなければならない。歴史的世界は文化と國家の矛盾に於て運動する。その矛盾的なる運動に意味を與へるものは、道德宗教ではないであらうか。歴史の中核はランケの所謂「道德的精力」„Moralische Energie“ S. W. 49/50, S. 200. 27/28, S. 313 でのみあり得るであらう。(歴史的世界の章に於てこの點について尙ほ多少觸れられる。)

3 歴史的 自然

「フリートリツヒ。……いかなる國家にも、彼をして普遍の一部分たらしめざる所以のものがある。却つて國家をして生命たらしめ、個體たらしめ、彼自身たらしめる所以のものがある。」……。

「カール。人は普遍から特殊に進むことは出来ないだらうか。」

「フリートリツヒ。飛躍なしに、新なる發端なしに、人は決して普遍から特殊に到達することは出

來ない。突然君の眼前に、思ひもかけぬ獨自性に於て立ち現はれる、この實在的・精神的なるもの *das Real-Geistige* は、いかなるより高き原理からしても演繹され得ない。特殊から君は恐らく慎重に且つ大膽に普遍に登り行くことは出来よう。しかし普遍的なる理説より特殊なるものの直観へのいかなる道も存しない。」

「カール。どこに君はしかしこの特殊を置かうとするのか。……。「かくてはすべてが粗野なる暴力に基くことになりはしないだらうか。」

「フリートリツヒ。戦争と云ふ言葉で暗示されると思はれる程にはないのである。基礎は出来てゐる。社會は結成されてゐる。しかし自らを普遍的なる意義にまで高めるべきためには、何よりも道德的精力 *Moralische Energie* が必要なのだ。道德的精力によつてのみ、競争者、仇敵は争闘に於て打ち勝たられる。」

「カール。君は血なまぐさい戦争商賣を道德的精力の争闘と見ようとする。餘り尊いものにならないように氣をつけ給へ。」「……………」

「フリートリツヒ。……。獨立の程度が、國家に世界に於ける彼の地位を與へるのだ。それはまた國家に、あらゆる國內の事情を、外に對して自らを主張する目的に適ふ如くに、調整する必然性を課するのだ。之が國家の最高の法則なのだ。」

「カール。君は軍國的專制を是認する様に見える。」

「フリードリッヒ。どうしてそんなことが……あり得ようか……。」「……。」「世界に於て指折り數へられ、何らかの意義ある國家は、すべて特殊な彼等に個有な傾向によつて滿されてゐる。國家をば、個人が寄り集つて彼等の私有財産を守るための安全裝置と見なすが如きは、むしろ笑ふべきことであらう。却つてそれらの傾向は精神的なものである。あらゆる國民の性格はそれによつて決定され、國民の上に消し難い刻印を捺してゐる。ここから生じてくる差別によつて、國體の諸形式は、もとより共同の必然性をもちはするが、到るところに於て異つた變様を受けるのだ。すべては最高の理念に基いてゐる。それが、國家も亦その起源を神に發すると云ふ意味なのだ。と云ふのは理念は神に起源するからだ。——すべて獨立の國家には彼に個有の根源的生命がある。その生命にも段階があり、滅ぶこともあるだらう、すべて生あるものがさうであるやうに。……。」

「カール。君が、國家は個體だ、と云ふのはこの意味なのだ。」

「フリードリッヒ。個性をもつたものなのだ。互に類似はしてゐる、——しかし本質的に互に獨立なのだ。契約説から君に現はれてくる雲の塊の様な、あのはかない凝塊の代りに、僕は精神的な本質を見る、人間精神の獨創的な産物を見る、——神の思想 (Gedanken Gottes) と云つてもよいであらう。」

「……………」

「カール。しかし教會も國家も、共に精神的なものだ。君はどこにその限界を置こうとするのか。」
 「フリートリツヒ。教會の精神は全人類に對して無制約的に妥當する。教會の精神は普遍的な精神だ。その本性上いづれの教會も普遍的教會であらうとする。之に反して、國家の理念は、もし國家が世界を包括せんとするならば、抹殺されてしまふだらう。國家は數多くあるものである。„Staten sind viele.“ 國家の精神はいかにも神の息吹である、しかし同時に人間の衝動である。それはより局限された性質の社會である。その上にはかのより高き、そして種々なる制約からより自由な社會が浮んでゐる。」
 Ranke, Politisches Gespräch. S. W. 49/50, S. 320-340. 多少長きに失して、しかも多くの重要な個處を割愛しながら引用された、このフリートリツヒの名に於けるランケの思想の、我々に與へる感じは、要するに國家のもつ二重的な性格であるであらう。國家は「神の息吹」にして且つ「人間の衝動」である。それは暴力に連ると共に、又理念に連る。要するにそれは「實在的・精神的なるもの」であるのである。そこに國家が一つではなくして常に多であり、普遍から演繹し得ざる個體である所以もあるであらう。しかしながら問題は、いかにして國家に於て人間的なる衝動が、神的であり、理念的であり得るかに存するであらう。ランケは云ふ。「權力そのものでは駄目である。權力は機關である。何のためにそれを使用するのか、はたしてそれを使用する術を心得てゐるか、

それがまづ大切である。」a. a. O. S. 310. 正にかくの如くである。しかしいかにして可能であるか。國家的生命の源泉の一つは自然である。民族と國家はかかる自然の變様であるとすら云へよう。國家の有つ威力はそれに基く。しかしいかにして變様され得るか。國家的生命の源泉の他の一つ、即ち理念と合流せしめ得るか。その保證はどこにあるか。理念が自然的で、自然が理念的であることはいかにして可能か。その媒介は主體に基く。しかしそのためには主體が既に自然的であり、且つ自然が既に主體的でなければならぬ。その轉化の發端を我々は既に環境的自然に於て見た。それは自己否定的、主體的な意味を藏したのである。その故にのみ環境的自然は國土となり、民族となるのである。しかしその根據が更に尋ねらるるならば、それは環境的自然が歴史的自然の一面であつたからである、と答へられなければならない。歴史的自然とはいかなるものであるか。又いづこから歴史的性格を與へられるのであるか。

自然を人間が認識し得るのは、人間が自然を構成したからである。それはカントの深き洞察であつた。しかし歴史の理性に關しては却つて事情は逆轉する。それは自然に於て準備され、自然を通じて誕生しなければならない。「精神の誕生は歴史の王國である。」Schelling, *Wesen der menschlichen Freiheit*. VII. S. 377. 精神も亦誕生する、しかも自然を通じて誕生する。自然に於ける遍歴が、空虚なる抽象的理性を、初めて歴史の理性にまで、即ち精神にまで成熟させるのである。精神とは

自然を媒介とせる理性である。しかしかくの如きことはいかにして可能であるか。自然は精神を産むと共に、精神の前階段となり、精神の前歴史となる。自然は歴史を産むと共に歴史的世界の前提となり、前歴史となる。自然は歴史の一部となるのである。自然は歴史の根源であることによつて、却つて自己を否定して歴史的となる。ここに問題解決の鍵は求められなければならない。しかしして之が歴史の基礎の問題にとつて、方法論的に最も重要なアルキメデスの一點を構成するであらう。自然からは單に自然のほかは産れないであらう。自然が歴史を産み得るためには自然が既に歴史的でなければならぬ。しかもそのことは單に歴史が歴史自身を誕生せしめると云ふのであつてはならない。歴史の底には歴史の誕生と墓地とがあるのである。私の語りたく願ふことはそれである。そのために普通の誤解を消去しよう。

歴史的世界に先だつて、自然的世界がある。自然的世界は歴史的世界の前歴史である。人はかく語つてそこに深き問題の潛むことを看過する。けだし「先だつて」或は「前歴史」とは、歴史的世界に於てにあらざれば意味なき言葉であるからである。従て自然的世界が歴史的世界の前歴史であると云ふならば、それは歴史的世界に先だつて、歴史以前の歴史が營まれてゐたと云ふ意味ではないであらう。歴史以前の歴史とは自己矛盾にすぎない。すべての歴史は歴史的世界と共に始めて展開されるのである。しかしわけても重大なことは、歴史的世界そのものの歴史、即ち歴史的世界の前歴史

が、歴史的世界と共に誕生すると云ふことである。原始自然より歴史的世界へと歴史的世界そのものの系圖が引かれる。それは形而上的歴史であるとも云ひ得よう。しかもかかる形而上的歴史そのものが、歴史的世界と共に始めて誕生するのである。歴史的世界の内に於て、歴史的世界の形而上的歴史が、原始自然に向つて、自らの基底に跡づけられる。單に歴史的世界に於けるすべてのものが媒介されてゐるのみではない。歴史的世界それ自身が自らを媒介するのである。それが形而上的歴史である。しかもそれは歴史的世界の刻々に於て、且つ常に誕生しつゝある。それは重大であるであらう。けだし歴史的世界以前の世界に於ては、たとへそこに無限なる時の流れがあるとしても、それは單なる一瞬に外ならないからである。單なる自然は無限なる一瞬間にすぎないであらう。かくて歴史的世界は刻々に原始自然より誕生しつゝある。歴史的世界の底は直接に原始自然である。しかも原始自然より歴史的世界への全過程は全き一つの瞬間である。それは永遠の今の出來事である。かくて自然は刻々に新に歴史的世界を誕生せしむると共に、歴史的世界はまた刻々に無限なる原始自然の否定の上に差しかけられてゐる。しかもそのこと自身が歴史的世界のなす業なのである。恐らくシェリングの自然哲學は、その偉大なる構想にも關はらず、自然の展開を歴史的世界に於て營まず、——即ちそれを歴史的世界の自己媒介的なる永遠の瞬間と見なさざりしことに於て、破れ去つたのではなからうか。歴史的世界は自然的世界に於て準備せられながら、しかも却つて自

然的世界を自己の前歴史として可能にすると語ることは、以上の如き意味に於て許容せられないであらうか。歴史的世界の底には無限なるしかも單なる一つの瞬間にすぎざる永恒の自然がある。しかしそれを自己の前歴史たらしめかくて形而上的なる意味に於てにもせよ、一つの歴史たらしめるのは、歴史的世界それ自身である。しかしてそれは歴史的世界が現實性を有する限り、同等の現實性を要求するであらう。それはむしろ歴史的世界の源泉ですらあるのである。歴史的世界は刻々に自己自身の歴史を展開させると共に、刻々に又自己の前歴史を反復せしめつゝあるのである。その意味に於て歴史は常に自然より産れつつあるとも云ひ得るであらう。しかし原始自然より歴史的世界への全系圖が、逆に歴史的世界の反映として、歴史的世界の動きと共に、歴史以前の歴史として成立するのである。人は歴史的世界に生きることによつてのみ、歴史以前の歴史をも共に生きるのである。かりに歴史的世界といかなる關はりもなき單なる自然が想定されたとしても、それは單なる瞬間以外の何ものでもないであらう。そこには歴史的なるいかなる秩序も系圖も見出し得ないであらう。それは歴史的世界を産むことによつてのみ、自己の系圖を生きているのである。即ちかくも云ひ得よう。歴史的世界を産むことによつて、逆に歴史的世界によつて産み反へされるのであると。自然的世界を歴史的世界の源泉たらしめることは否定的に媒介せずしては不可能である。自然は歴史の母にして且つ妻であり、妹であり、更にはその娘ですらあるであらう深き祕儀は、以上の如く

にして理解せられないであらうか。しかしてそのとき歴史的世界は眞に自己自身を媒介したのである。あらゆる世界の發端となつたのである。けだし自然的世界を却つて自己の源泉として可能ならしめることにより、自己の根源を自己の内に藏し得たが故である。それは自らの始まりを始めるものとして、あらゆる始まりの始めである。自然的世界は歴史的世界の前歴史であるならば、それは歴史的世界によつて打ち勝たられた永遠の過去であるとも云へよう。歴史的世界は自らの過去を可能にするものとして、あらゆる過去の始めである。歴史的世界に先立つ世界はない。しかも歴史的世界は刻々に原始自然より誕生しつのである。してみれば歴史的世界はまた刻々に自然的世界を乗り越え、自らより斷り放ちつつあると言はねばならぬであらう。歴史的世界は自然的世界を過去となす決斷 *Entscheidung* に於て成立するのである。恐らく過去に現在を産む力はない。過去は過去に連るのである。過去を産むものは却つて現在である。歴史的世界である。シェリングは「世代」に於て語つて云ふ。「自己を自己自身から(即ち彼の本質の底に置かれたものから)引き放す力を有する人間のみが、過去を創造する力を具備する。正に彼のみが眞の現在を享受すると共に、本來の未來の近づくのを見る。」Schelling, *Weltalter*. VIII. S. 259. シェリングにとつても永遠の過去とは自然にはかならなかつたのである。現在の底に打ち克たれたものとして横はる過去のほかに過去はない。」a. a. O. 「人間的自由の本質」に於ける *Natur in Gott* は「世代」に於ては、より多く

Natur Gottes の呼び名の下に歴史性を賦與せられ、神の歴史に於ける過去となつた。

自然は否定されることによつて、歴史的世界に座を與へられる。過去は過去とされてのみ、現在の内に許される。歴史的自然の歴史的性格は、歴史的世界に於ける否定に基く。歴史的世界は自己の根柢を否定することによつて、自己の根柢を許容するのである。そこに歴史的自然の歴史性は成立する。しかし歴史的自然はただ單に否定的な性格をほか、歴史的世界に於て有し得ぬのであらうか。ルネッサンスは人間の誕生の時代であると云ふ。しかして當時の貴人について「マタラツツォは語る。『貴人の豪華に、馬、犬、騾馬、はひ鷹やその他の鳥、道化者、歌い手そして珍らしい動物が屬してゐる。』」Burchardt, Die Kultur der Renaissance in Italien. IV. Abschnitt, 2. Kapitel. そのやうに自然は自主的な人間に對しては單に従者の位置にはか立たないのか。まことに歴史的自然も歴史的世界の否定的契機にすぎないであらう。そして自然が征伏されるところに國家も始めて可能になるのであらう。國家が歴史的世界の基本的動力の一つである限り、それは當然でなければならぬ。バツコーフェンはローマの世界史的意義を、東洋的自然主義の克服に認めた。「我々の西洋的生活は實に本來ローマと共に始まるのである。」そしてそれはローマの國家を通じてなされたのである。「いたるところに於てローマ人は、自らを歴史的生活の第一の因子と思惟した。ローマ人は東洋の自然主義が彼に負はした枷を忍ぶことを甘んじなかつた。宗教とそのすべての擬制を國家目的に

奉仕せしめた。」Bachofen, *Italien und der Orient*, S. 218-219. 之は單にローマ國家についてのみ語らるべき言葉ではない。國家が國家として誕生する以上、自然は國家にとつて從屬的な位置に轉せしめられるのである。しかしそれが歴史的自然の唯一の意味であらうか。

しかしそれにも關はらず歴史的世界は依然として自然的世界の底から誕生するのである。「母なる大地」*Mutter Erde* の信仰は、恐らくいかなる國家の成立によつても、直ちには消滅しない。「それ故、城壁も樹木と等しく母なる大地の所産である。樹木が根によつて母體と結ばれてゐる様に、城壁も土臺によつて、誕生の後にも、母體と持續的に鞏固に結合されてゐる。」Bachofen, *Urreligion*, S. 1. たとへ「樹木を支へてゐる大地よりも、樹木の方が一層古い」*a. a. O.* と云ふ興味深い轉換が行はれるにもせよ、大地は尙ほ樹木を支へてゐるのである。たとへそのこと自身が歴史的世界のなす業であるにもせよ、自然的世界は歴史的世界の生死の場であるのである。してみれば自然的世界は單に歴史的世界の永遠の過去ではないであらう。自然は單に法則的必然の自然ではなくして、更に創造的なる無を含む自然であるであらう。自然的世界は却つて歴史的世界の永遠の未來に連り、歴史的世界の永恆を保證する。歴史的世界に於ける滅びゆくものと生れきたるものとは、歴史的自然によつて媒介されるのではなからうか。「最古のキリスト教の布教は明かにローマ人の道路との關聯を示してゐる。ローマ人の道路が教會布教の經路と流布の基礎をなしてゐる。この考察は近年

の發掘によつて確證される。……そこに於てはキリスト教の教會はローマの殿堂の上に直接に建設されたやうに見える。」Alfons Dopsch, Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung. I. S. 131. 或はまた「ローマの半圓形劇場の跡が、ここに於ても他の處に於けるが如く、最古のキリスト教徒の團體によつて利用せられてゐたことが明になつた、」M. O. S. 105. のである。それ等はドブシュによつて、城壁の跡、耕地の境界等と共にローマより中世への文化の連續の必らずしも切斷されてゐないことの證據に擧げられてゐる。自然は例へば道を通じて文化の傳達の媒介となると共に、時代より時代への傳統の地盤ともなる。自然は歴史的世界の過去にして且つ未來に接する。國土は國家に於ける過去にはつきずして、また未來を保證する。永遠の今を通じて自然は歴史の過去と未來を包む。歴史的世界は自然的世界に對して否定的にして且つ肯定的である。しかしてそれは歴史的世界が、原始自然と永遠の今の間位置することに基きはしないであらうか。歴史的世界の生死は自然的世界に基く。しかもそのこと自身が歴史的世界の業である。それは端しなき循環であらう。しかしこの循環もなほ永遠の今に連る實踐的道德的精力によつて乗り越えられ得るのである。歴史の意義は正にそこに成立する。

自然は歴史的世界に於て否定的に肯定される。單なる環境的自然は歴史的自然に高められる。自然そのものが主體性を得てくるのである。しかしてそれは自然が自らを物語ると云ふ現象によつて

確められはしないであらうか。自然は何ごとかを物語ることによつて歴史的世界の内に取り入れられ、歴史的自然となるのである。既に環境的自然が我々を促し、唆りたてるであらう。しかし歴史的自然はロゴスを語るのである。それは欲望の對象ではなくして、一つの汝である。古代支那人は山川を祭つたと云ふ。多くの祭りには自然との對話の跡がある。自然は自らを物語ることによつて、(I)まづ傳説的な自然となりはしないか。神話は多く自然の言葉ではなかつたか。「人は自然の内に何もものをも假構したのではない。人は自然より神話を相續したのである。」Herder, Ideen, VIII. 2. 言葉は「大地の言葉」 „Sprach der Erde.“ Herder, Abhandlung über den Ursprung der Sprache. 3. Naturgesetz. であり得たのである。しかしながらそれと共に、自然は既に單なる自然ではなく、歴史的世界の内に取り入れられてゐることに注意しなければならぬであらう。けだし言葉は常に同時に人間の言葉でのみあり得るが故である。(II)しかしそのみではない。ロゴスは人間に對して否定的な意味を有つ。かくてのみそれは眞にロゴス的となるのである。ロゴスと法の關係については他日を期する。ただ言葉はしばしば「神の聲」Stimme (voies) として聞かれはしなかつたか。幾多の掟は神によつて定められたものではなかつたか。ロゴスに於ては單に主體的とは言ひ難きものが、即ち超主體的なもの非人間的なものすら現はれるのではなからうか。しかしてそれが神の聲と呼ばれたのではなからうか。自然はまづロゴスによつて主體的となり、更にロゴスによつて世界性に向

つて主體性から解放される。ゲルマン法に於ても「境界標の惡意ある毀損及び移動は神を冒瀆するものと見なされた。」ローマの特色はヘーゲルによれば「他の民族に於ては宗教的傳統が既に最古の時代からあらゆる公民的の制度に先んじて現はれるにも關はらず、宗教が國家の合成におかれて現はれたことであつた。」Hegel, *Philosophie der Geschichte*. (Glockners Ausgabe. XI. S. 383. (Thiering, *Geist des römischen Rechts*. I. S. 99 參照) しかもかかるローマに於てなほ「*Ius* は人間の掟であり、それ故可變的にして、形塑的である」に對し、「*Fas* は宗教的な神聖な法であり、即ち啓示された法である」Thiering, *Geist des römischen Rechts*. I. S. S. 266-267, 268. Anmerkung. であつた。我々はロゴスを通じて自然が否定的に高揚されるのを見るであらう。ロゴスによつて自然も歴史的世界に於て權威あるものとなる。自然は單なる自然ではなく、慣習は法となり制度となる。ロゴスに於て自然は單に生死の場ではなく、高次の次元へと否定的に高められる。歴史的自然はすべてロゴスを通じて人間社會へ組織されるのである。すべての制度の一面にはロゴス的な否定があるであらう。けだし人と人、血と血は、——先に環境的自然について、外的環境と内的環境、即ち土と血を區別したことを想起せよ——ロゴスによつて否定的に媒介され、かくて種々なる制度も現はれ、それと共に土もまた人間社會の一項となるのである。かかる意味に於て「あらゆる文化の尖端に一つの精神的なる奇蹟が立つ、即ち言葉が立つ、」Burchardt, *Weltgeschichtliche Betrachtungen*. S. 58.

と云ふことも出来るであらう。まことに言葉は「理性の本能」; Instinkt der Vernunft; である。音響と呼ばれる一自然現象をして人間と人間の媒体たらしめるのが言葉である。ロゴスに於て自然的人間の自然性は否定される。ロゴスに於て人間は自己を抽象し、自己の自然の外に出る。かくて言葉は深く自然に連ると共に神のものにつながる。自然の否定につながる。言葉は自然の言葉にして、人間の言葉であり、更には神の言葉ですらあるであらう。少くとも歴史的世界の世界性はロゴスに基くのである。まことにフンボルトの云ふ如く、「人間はただ言葉によつてのみ人間である。しかし言葉を見出し得んがためには、人間は既に人間であつたのでなければならぬ。」(Humboldt, Werke, IV, S. 24)であらう。しかしこの著明なフンボルトの言葉は、ロゴスのもつ否定的な性格の故に、「それと共に人間は單なる人間の境を出る」と云ふ補足を望ましきものとしてはゐないであらうか。

言葉はまことにロゴス的である。しかし言葉は常にまたオルガノンの機關的である。そのことはロゴスに媒介された歴史的自然がオルガノンのことを結果するであらう。歴史的世界は單にロゴスのなる自然を含むのみではない。一面に於てそれはオルガノンのなる自然でもあるのである。人間は自然に手をかけることが出来るのである。言はば自然の取手を捕へてゐるのである。歴史的自然は様々なるオルガノンの巨大なる關聯であるであらう。そこにすべて歴史的世界の

機構の根據がある。血と血の否定的媒介は言葉であつた。土と血の否定的媒介は道具である。人は道具を有つことによつて、自然に作業する。しかもそれは自然との連続の無限の切斷である。道具を有つことによつて人は自然から獨立する。言葉が理性の本能であるならば、道具は悟性の本能 *Insinuit des Verstandes* でもあらう。道具に於て人間悟性は誕生する。道具の内に悟性的知識は蓄積され、結晶する。言葉が文化の基礎であるならば、道具は文明の基礎であらう。歴史的世界は全自然を生産の手段とするのである。巨大なる機構として廻轉させるのである。そこに文明が進展する。「技術はわけてもまづ人間の腕の、しかして人間の手と指の制作である。しかし技術は、いよいよ指にゆだねられるにつれて、益々人間悟性の制作となる……。」*Tönnies, Geist der Neuzeit, S. 169.* 歴史的世界はロゴス的にして且つオルガノンのである。人間社會の組織も常にその兩面を有つであらう。權威はロゴスに基き、效力はオルガノンに基く。しかしてロゴスとオルガノンとは互に互を豫想しつゝ、しかも必ずしも一致しない。けだしロゴスは自らの目的を自己の内に有し得るに關はず、オルガノンは自らの目的を自己の内に有し得ない。それは先に觸れた内的環境と外的環境の矛盾の高次の形態に於ける反復ではないであらうか。

歴史的世界の力學は互に矛盾するこの二つの否定的媒介の對立の内にも認められる。歴史的世界はその矛盾的關聯に於て運動する。近代都市は疑ふべくもなく、巨大なる機構である。しかもその

眞のロゴスは見失はれた。それが何を表現するかを人は読み得ない。目的なき機械！それは歴史的世界のほど近き變動を豫告しつつあるのではなからうか。

かくて自然は環境的自然、歴史的自然的の階段を通じて、絶えず國家と文化の世界へ自らを否定的に高め、歴史的世界への運動を成就する。それはすべて原始自然が永遠の今の内にして外なることに基くのである。その際ロゴスは否定的媒介の主要契機をなす。自然は單なる實在性を否定されることによつて、世界となるのである。ロゴスの抽象性に自然は遊離せしめられねばならない。しかしてテヒネもオルガノンに應じて世界への否定的媒介の主要契機であるであらう。既にギリシャに於ても國家は單に生物とのみ視られたのではなく、藝術作品に類する *Hitzel, a. a. O. S. 285 ff.* とされた。作品であるが故に、それを導く術としての政治學も起り得べく、國家は單なる自然物につきざる所以も認められよう。世界は廣義のテヒネの媒介を経過する。世界は、單に實在的なる自然に比しては、無限の否定を含む。自然よりの遊離と抽象によつて、無限に可能なる世界となる。それは主體と客體の分裂、可能と現實の剝離、國家と文化の争闘を含む。それは矛盾の場である。しかしそれは無限の矛盾を起すが故に、却つて矛盾に捕はれざるもの、矛盾に破られざるものとも云へよう。かかる祕密に參することに、眞の哲學と宗教の祕儀はないであらうか。しかして歴史的基體

もかかる祕儀を證しする世界の一面ではなからうか。それはあくまでも歴史の底にありながら、歴史の底に固着しない。それは不動の自然ではなくして、むしろ辯證法的自然である。それは歴史的世界を産むことによつて、却つて自ら産みかへされるところの、(その母にして且つその妻であり、妹にしてかつその娘であるところの)、常に原始自然として歴史的世界の底に潜みつつ、しかも環境的自然、歴史的自然として歴史的世界に對し、且つ歴史的世界の内に、自己を否定的に成立せしむるところの——歴史的世界と共に運動する——神の内なる自然であつたのである。